第141回（令和3年度第2回）評価専門調査会における論点（案）

資料５

（深堀分析の手法と、基本計画に設定された指標と施策群のアウトプットの接続について）

○ 提案した深掘り分析の手法（A-1、A-2、A-3、B）のアプローチは適切か。

○ 特に、ロジックチャートに位置付けられる指標と、施策群のアウトプットを適切に結びつけるにはどのようにすべきか。指標の変化にタイムラグが存在することを考慮すれば、まずは施策群のアウトプットを適切に把握することが重要ではないか。特に、指標への影響度が大きいと考えられる、第6期基本計画の目標を達成するために開始されたフラッグシップ的な施策に注目することが適切ではないか（例えば、どのような施策に注目すべきか）。
これら施策のアウトプットがもたらす基本計画における指標（若手研究者数、論文数、多様性等）への影響度や、これまでの調査内容との差分による改善の兆しを把握することが考えられないか。

（行動に動機付けを促す指標について）

○ 評価専門調査会においては、指標を用いて基本計画の進捗状況を把握する取組を開始したところ。指標にはこの役割に加えて、現場における行動に動機付けを促す役割があるのではないか。どのような指標を設定すればそのような役割を担うことができるか。

○ 基本計画において設定された目標が、（政府の施策により直接的にリーチするものではなく）組織のマネージメント等に拠るところが大きい場合、目標が適切に共有されたうえで、メタ指標を設定・収集することが適切ではないか。（「研究環境の再構築」におけるメタ指標の例としては、研究サポート体制に満足度を把握している大学数、女性研究者の割合拡大を目標設定している大学数、若手研究者の割合を公表している大学数、優良事例の横展開への取り組む大学数など。）

○ 評価専門調査会が、基本計画の目標の達成に向けて重要視する指標は、新たに策定される政策パッケージや、新たに開始されるフラッグシップ的な施策においても目指すべき方向性として共有されることが適切ではないか。例えば、若手研究者の支援等について、10兆円規模の大学ファンドの運用が計画されているところ、当該支援のモニタリング・評価は客観的な指標に基づいて行うことが検討されており、指標の設定や改善への貢献も考慮されるべきではないか。

（効率的なデータの収集について）

○ 指標のためのデータ収集は、それ自体が目的化することなく、現場への負担も考慮して行われるべきではないか。どのようなアプローチが考えられるか。既存の調査や、e-CSTIによるエビデンス収集・分析の取り組み、（フラッグシップ的な施策など）施策の実施に合わせて収集されるデータを活用することを検討すべきではないか。

○ 基本計画のフォローアップや統合戦略における「実施状況・現状分析」等を、各省庁が推進する施策群の進捗状況把握の機会として適切に活用し、効率的な評価・分析のサイクルを構築することが必要ではないか。